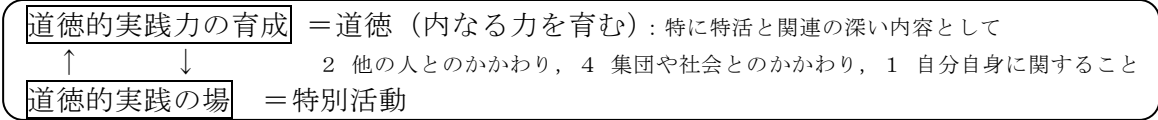


1 特別活動における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 学習指導要領の確認

- ① 特別活動で育成したい資質や能力の明示
 - ・ 人間関係に悩む若年層の増加から、全体目標に「人間関係」を加えた。
 - ・ 各活動，学校行事の目標を新たに規定した。
 (よりよい人間関係を築く力，集団の一員としてよりよい生活づくりに参画する態度を特に重視)
 - ・ 特別活動の目標・内容は基本的に小中高同じ。
- ② 適切な指導計画の作成と資質や能力を育成するための諸活動の充実
 - ・ 全体計画，年間指導計画を作成し，それらに基づいて学年，学級の指導計画を整える。
 - ・ 学校生活への適応に配慮した計画を作成する。
- ③ 道徳的実践の指導の充実
 - ・ 望ましい集団活動や体験活動は，日常生活における道徳的実践の指導の重要な機会。
 - ・ 集団を通して身に付けたい道徳性の育成には，全教職員で共通理解して，身に付けさせたい力を意識して取り組むことがポイントとなる。



(2) 評価の確認と留意事項

- ① 各学校の実態を踏まえた評価
 - ・ 重点目標を設定し，評価の観点，評価規準を作成。
 - ・ 特別活動を通して育てたい生徒像を明確にする。
 - ・ 教師個人の活動にせず，全教職員で共通理解を図る。
 - ・ 毎年変更される観点にせず，長期的な視点で。

[指導要録の改善]

「評価の観点は各学校において定めることができる」

- ② ねらいを明確にした評価
 - ・ 共通実践と教育効果の観点から，重点化を図る。
 - ・ 1 単位時間の観点は一つに絞ることで，ゆとりを持った指導を行う。
 - ・ 目指す生徒の姿を明確にする。
 - ・ 情緒的，文学的，抽象的な目標にしない。十分満足できる活動の状況を明らかにする。
 - ・ 全教職員での共通理解を図りやすくするとともに，評価の客観性を高める。

例: 「たくましく未来を切り拓く」評価ができないため「PDCA」が回せず，教育と言えない。
- ③ 多面的で総合的な評価
 - ・ 結果だけでなく，過程における生徒の努力や意欲，生徒のよさを，観察，質問紙，自己評価や相互評価で把握する。
- ④ 評価体制の確立
 - ・ 学級を超えて評価資料の集約を図るシステムの構築が必要。
 - ・ 全教職員で共通理解を図るため，目指す生徒の姿，評価資料・評価結果を揃える。そのことが評価の信頼性につながる。
- ⑤ 生徒集団と学校の評価
 - ・ 生徒集団の評価…学級を超えて，生徒集団の発達を評価する。⇒特別活動の PDCA
 - ・ 学校評価…目指す生徒の姿を意識し，学校行事などで保護者や地域住民と協働で評価する。

特別活動の記録					
内容	観点	学年	学年		
			1	2	3
学級活動	○ 集団活動や生活への関心・意欲・態度 ○ 集団や社会の一員としての思考・判断・実践 ○ 集団活動や生活についての知識・理解		○		
生徒会活動					
学校行事					

例示を参考に学校の取組に合わせて設定

観点を追加できるよう空欄にしてある

中学校 特別活動

(3) 話し合い活動の留意事項

① 話し合い活動の仕方

- ・ 活動形態に応じて、集団としての合意形成を図るか、個人が解決策等を選択・行動する。
- ・ 話し合いの仕方やルールについて、言語活動充実の視点から全教職員の共通理解を図る。
- ・ どんな活動(手段)でこんな合意形成をします、等、あらかじめロードマップを生徒に示す。
- ・ 言語活動の充実～「重点化」がカギとなる。

参考資料：『言語活動充実のための指導事例集』文部科学省

掲載事例1：よりよい生活を築くために集団としての意見をまとめるなどの話し合い活動

掲載事例2：体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動

② 小中連携を図った話し合い

- ・ 小中高の目標と内容はほぼ一致している。議題選択、話し合いの仕方、ルール等、特に中1において小学校6年間の財産を生かす。
- ・ さまざまな話し合いの形態を学ぶ。意見の異なる人と協働的に問題解決するための議論。

③ 全教職員で取り組む

- ・ 特活は学校全体で展開される。全校、学年部単位での共通理解が重要。
- ・ 互いに授業を参観し、全校、学年でよりよい特別活動を目指して意見交換を図る。

(4) 体験活動の充実の留意事項

① 事前の活動、事後の指導の充実を図る

- ・ 事前指導では、行事の意義やねらいを理解し期待感を高める(準備により意欲を高める)。
- ・ 学級の目標との関連から自己の目標を一人一人に設定させる。
- ・ 事後指導では体験を振り返り、話し合いや発表から他者との共有を図り、広い認識につなげる。
- ・ 自己を振り返り、その後の学級や学校生活について考えさせる(次への意欲を高める)。

② 生徒の創意工夫を生かす

- ・ 学活や生徒会活動との関連を図り、生徒の自発的な活動を促し、「内発的動機付け」を図る。

③ 一人一人の生徒を生かす

- ・ 集団の中に個人を埋もれさせない。役割分担がカギとなる。
- ・ 教師と生徒の人間的な触れ合い、生徒相互の人間的な触れ合いを大切にする。
- ・ 集団活動の場面における個別指導の充実を図る。

④ 3年間を見通して指導する

- ・ 行事で生かされる生徒を忘れない。
- ・ 授業時数の増加を機に、学校行事や生徒会活動の工夫を図る。
- ・ 時数のみに着目した一律削減ではなく、学校文化を大切に重点化を図る。
- ・ 統合する際は3年間を見通し、小・高との関連も留意して、系統性・発展性を考える。
- ・ 年間のバランス、負担過重にも注意する。

⑤ 人、自然、社会との効果的な体験活動の充実

- ・ 多様な交流と触れ合いを通して、自己の生き方を考えさせる。
- ・ 教科、道徳、総合、その他の内容との関連を図りダイナミックな体験に。
- ・ 体験が生徒の活動意欲につながる。体験さえ行えばという考えは捨てる。

〔職場体験は1日より2日、4日より5日行った方が、学習意欲が向上する〕

国立教育政策研究所生徒指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」平成25年3月

2 その他

- 小学校版リーフレット(H25.7月発行)の活用を。【楽しく 特活 検索】
- 国立教育政策研究所 Web ページにて pdf データを提供中。

